

イエスのおかあさん マリア

わきたあきこ 文
やの しげこ 絵



イエスのおかあさんマリア



わきたあきこ 文 今のしげこ 絵

女子パウロ会

はじめに

マリア……

このやさしい名まえのおかたは、どなたでしょうか。世界じゅうの画家たちが、かぞえきれないほど、マリアのえを誇り、世界じゅうの音楽家たちが、聞いても聞いてもあきないような、うつくしいマリアのうたをつくりました。

朝からばんまで、どんなにたくさんの人びとが、たのしいときも、苦しきときも、マリアのなまえをよぶことでしょうか。

マリアは、神さまではありません。けれど、神さまから、いちばん愛された人でした。

わたしは、日本の子どもたちが、すこしでもマリアのことを知り、マリアをすまになつていただきたいと願って、この本を書きました。





小さいとき…………… 1
おききげ…………… 11
ヨセフにあつて…………… 12
うれしい知らせ…………… 13
おてつだい…………… 14
こまよりの町への旅…………… 15
イエスのたんじょう…………… 16
おそろしいことば…………… 17
東の国から…………… 18
王さまのわるだくみ…………… 19



ナザレに帰つて…………… 21
見えなくなつたイエス…………… 22
ヨセフの死…………… 23
おわかれ…………… 24
などう酒がない…………… 25
すくいぬしのしごとのかけで…………… 26
イエスにさからう人びと…………… 27
さいごのばん…………… 28
かなしいぎょうれつ…………… 29
これがあなたのおかあさん…………… 30
イエスのよみがえり…………… 31
でしたらといっしょに…………… 32
天国へ…………… 33





小さい子



いまから、およそ二千年もまえのことです。

ユダヤの国のナザレという小さい町に、ヨアキムという、しょうじまでりっぱな人が、妻のアンナといっしょにすんでいました。

ふたりには子どもがいなかったのです。そればかりをかましてみながら、ひっそりとくらしていました。

「子どもをおおきくけうたはらう。」

と、ふたりはどんなに神さまにいのちたことでしたらう。でも、神さまは聞いてくたさらないよかったです……。いいえ、神さまは、ただ、よい時を待っておられたの

です。

アンナは、かみに白いものがまじるようになって、
思いがけなく、あかちゃんを生みました。

アンナもロアキムも、まるでゆめを
見ているようなきもちでした。

いつもひっそりしていた家の中は、
きゆうに春が来たように明るくなりました。

しんせきの人や、近所の人たちが、
みんなおいおいにやってきました。

「おめでどうう。」

「おめでどうう。」

「神さまはなんとめくみふかいかただらう。」



「ちん、なんてかわいい子。」

「まるで、ゆりの花みたい。」

「いいえ、てんしのようよ。」

と、あつまってきた人たちは、みんなちんちんというのです。

そうです。生まれたあかちゃんは、とてもかわいくて、花のようにうつくしい女の子だったのです。

その日は、まるでてんしのようにかがやいて、くらいつやの中をでらしてしました。そして、このあかちゃんを見る人は、なにかしらたのしい、こうよくなきもちになるのです。

ロアキムは、この子に、マリアと名まえをつけました。マリアとは、「神さまから愛されたむすめ」という意味で、ユダヤの国では、こまかくつうの名まえでした。

ロアキムもアンナも、まだ、どんなにじぶんたちのむすめが、神さまから愛されているかを、わかることはできませんでしたが……。

マリアはだんだん成長しました。

小さいとき、町の広場やろじを駆けまわって遊ぶすがたは、ほかの子どもたちとちっともかわっていませんでした。ただ、三歳になるころには、もうおいのりすることをよくおぼえただけでなく、とてもすきなように見えました。年をとった両親のあいだにすわって、小さい手をあわせているマリアを見て、かんしんしない人はありません。

もっと大きくなって、しごとができるようになる、マリアは、いっしょうけんめい、おかあさんをてつだいました。町の共同いどまで水くみにいったり、ぶどうのとりいれをてつだったり、小さい手でできることはなんでもしました。

外に遊ると、だれとでもすぐにともだちになることができます、みんなからかわいがられました。よわい人とか、からだの不自由な人、ますしい人をわらったりするよきなことは、けっしてありません。かえって、なにかてつだってあげることはないかと、いつも気をつけているようでした。

